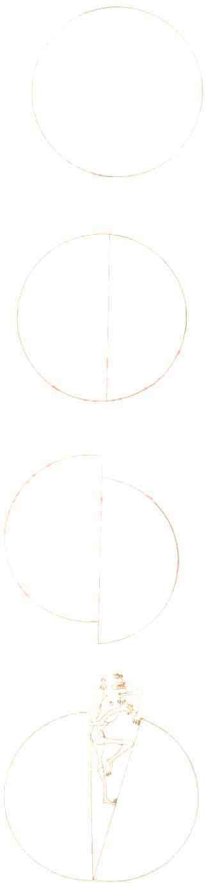
心優しき叛逆者たち

上巻

井上光晴



新潮社版

心優しき叛逆者たち（上巻）
昭和四十八年八月三十日　発行
昭和四十九年四月三十日　七刷
定価九五〇円
著者　井上光晴
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話（〇三）二六〇一一一一
振替　東京八〇八番
乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。
印刷・東洋印刷株式会社　製本・新宿加藤製本
© Mitsuharu Inoue. Printed in Japan, 1973

心優しき叛逆者たち（上巻）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

0

天皇の側近を暗殺しようとして果せなかった経歴を持つ、右翼の老テロリストが縊死したという、郷里の従兄から伝えてきた手紙のことを、御厨竜秋（みくりやたつあき）は電車に乗ってからずっと考えていた。二十歳になるかならぬかで最初の結婚をして以来、四年の間に三人の女を正式に変えた銀行員の従兄がなぜことさらそんな話を知らせてきたのか。戦後二十四年の情況に絶望して首をくくったのだと、誰かの受売りらしい言葉を、従兄はもっともらしく並べていたが、死んだ老人は今の家内と遠縁にあたるのでかまわないわけにもいかず、うんぬんの文字をよんだ時、彼は思わず苦笑したのだった。乗換え駅で降り立った若い妊婦の生暖かい匂いの残った座席に腰をおろしながら、彼は向い合わせた女に視線を走らせたが、藤色のワンピースの内側に、彼女も明らかにふくらんだ腹を抱えていた。労作「ゾルゲ追跡」に名誉回復を挑む元特高。電車が速度をゆるめるたびに吊り下がった週刊誌の広告はめくれ上がる。

帽子をちょっと阿弥陀にかぶった改札口の駅員は、気分でもいいのか彼の定期券を見ると妙にうれしそうな顔をした。道路を拡張するため、毎晩慌しい掘鑿（くっさく）音を響かせている踏切りを渡ると、御厨竜秋は金物屋に隣接する薬局の古びた硝子戸（ガラスど）の前に立った。一昨日の午後も彼はそこに立ち

止まったのだ。しかし、彼は硝子戸に手を触れず、とぐろを巻いた水道のゴム管に躓きながら金物店に入った。そして行当りばったりに三十円の釘袋を買い、怪訝な手つきで釣銭を差しだす老婆の目先で、それを無理矢理ジャンパーのポケットに突込んだのである。

御厨竜秋が薬局の中に入ると、薄暗い奥から出てきた恰幅のよい主人は、ものもいわず低いカウンターの向う側に立った。

「ブロバリンを下さい」彼はいった。

「印鑑持ってるね」薬局の主人は彼の顔を見もせずに横柄な口をきいた。

御厨竜秋はジャンパーから黙って三文判をだすと、カウンターにおいた。すると主人は白い腕を手品のようにくねらせて「毒劇薬」とマジックで書いた手帳を取りだした。手帳に結びつけられたボールペンを使って正確な字体で住所氏名を記入し、年齢は二十四、職業は学生と書きかけて抹消。使用目的の項には前日の購入者と同じく「眠れないから」と書いた。主人の上膊部は全く晒したように白く、右腕の肘に貼られた茶色の細い絆創膏が余計にそれを目立たせていた。彼はそれまでこの薬局で二度しか買物をしていないが、同じ男から二度とも、もっと愛想よく振舞われたのだ。ブロバリンのせいではあるまい、と彼は思う。ブロバリンをくれという前に、奥からでてきた主人は挨拶さえしなかったから。

白い手から受取った緑色の小箱を握りしめたまま、薬局をでると、彼は玩具店の店先におかれている赤電話を目がけて道をよぎった。ダイヤルを回すとすぐ、もしもし内田です、という少女の甘ったるい声がきこえ、それに重なってテレビの歌曲らしい旋律が跡切れ跡切れに流れてきた。

「すみませんが、中沢典子さんを呼んで下さい。僕は御厨といいます」彼はいった。あらわれる彼女に何といえばよいのか。千二百円借りっぱなしにしとくよ。それともあっさり、今夜に決め

たんだ、というか。

しばらく間をおいて甘ったるい声が彼の耳の中で響いた。

「九時過ぎの電話はお取次ぎしないことになっています」

九時過ぎ。腕時計の針は八時三十五分を差したきり動いていない。彼が言葉をつなごうとした途端、相手は受話器をおろした。九時過ぎの電話を取次がないことは何時から決められたのか。彼はもう一度ダイヤルの穴に指を入れたが、思いとどまった。そうか、それじゃこれでほんとにおしまいというわけだな。

それでも十分余り彼はそこにじっとしゃがんでいた。アパートまでの途中、他に赤電話はなかったし、自分でサセボ・ハリケーンと名付けている痛みが襲ってくる予感がしたのだ。彼は親指の腹を両方の顳顬に強く押しあてながら、よだれのような唾を吐いた。半年程前、突然目のくらむほどの痛みを後頭部に感じて以来、鎮痛剤の効かぬ激痛は周期的に彼を襲っていた。やがてその周期は二十日から二週間になり、先月あたりから九日か十日毎にまでも縮められていたのである。佐世保の平瀬橋で機動隊員の警棒に割られた頭を縫ったあと、予後を検査した大学病院の若い医者は彼を診断するたびに首をかしげていたが、それにしても今夜の兆候は周期的にも少し早すぎる。

のたうちながら自殺するなんて、さまにならないからな。電車から降りたらしい男たちがのぞき込んだような気配がしたので、御厨竜秋は立ち上がって電話機に十円銅貨を入れた。

「夜分すみませんが、緊急の用なんです。中沢さんに取次いでいただけないでしょうか」

「中沢さんはいませんよ。旅行にでもでられたんじゃないですか」男の声が間をおかずに返ってきた。

旅行にでた。「もしもし……」と彼はいったが、すでに相手の応答はなかった。今夜だけならそんないい方をするはずはないから昨夜も中沢典子は自分の部屋に戻っていないのだ。君の方が詳しいだろうが、中沢さんもなかなかやるね。コレクションがまたひとり増えたそうだよ、と皮肉な捨台詞を吐いた牧崎務の声。

四日前の夜、新宿京王線の乗場でアルバイトからの帰途、彼は偶然牧崎務と出会ったのだった。紀伊国屋ホールで公演中の『正義の人びと』を観ての帰りだという牧崎務の顔つきは、二ヵ月ばかり見ない間にどことなく不潔な印象を強めていた。

「さっぱりじゃねえか。同人会議にもおでましにならないし……」

「飽きたよ、もう。……」彼はいった。何時もならなるべくからまれないような言葉遣いをするのだが、もうどうでもよかったのだ。

「飽きたって。そりゃ理由をききたいもんだな」案の定、牧崎務は突っかかるような口調で彼の言葉を捉えた。「文学ですか。それとも変革する意志に飽きたんですかね」

そんな言葉だけのやりとりに飽きたんだ。「自分に飽きたんだよ」彼は低い声でいった。

「へえ、今時はやらない思想に取りつかれたもんだな……そりゃはやりませんぜ」

「はやらなくてもいいさ。おれは言葉の奇術をあまり好かんからね」彼はいった。好かんからね、という出身地のアクセントをまじえて。

初め、おやという表情を示した牧崎務の顔つきはみるみるうちに険しくなった。「言葉の奇術だって。何だってそりゃ。……はっきりわかるようにいってもらいたいな。誰が言葉を奇術みたいに使っているんだい。……」

お前さ。それから同人たちの全部。彼は口の中でいった。

「まさか君は現実と言葉を対立させようというつもりじゃあるまいね。言葉の奇術っていうのは君らしい表現だけど、思想を否定する通俗的な現実主義から一体何が生れる……」

電車がホームに入ってきたので牧崎務の声は消えたが、その瞬間御厨竜秋の中に取返しのつかないような嫌らしい気分が湧いた。何をいわれても彼が黙り込んでしまったのと、乗客がたて込んでいるせいもあって牧崎務は自分の言葉を途中で打切らざるを得なかったが、降り際に取っておきの挑発を試みるという口調で「君の方が詳しいだろうが、中沢さんもなかなかやるね」と囁くようにいい捨てたのだ。コレクションがまたひとり増えたそうだよ。

御厨竜秋は玩具店の赤電話から自分にむかって強制するように体を離した。中沢典子が誰と何処に泊っていようと、おれとは元々何の関係もないことだ。岸上大作は死んで行くためのノートに「これは失恋自殺。ぼくのポケットにはひとりの女の写真がだいじにしまわれている」と書き残したが、おれの場合は失恋というより、失恋することさえも拒否されたというべきだろう。去年の夏、中沢典子と一緒に佐世保で過した日々と、新学期になって撒き散らされた噂を同時に交錯させながら、彼は一週間程前、突然はやっている店を解体してしまった八百屋のあたりで、後ろからくる靴音を追越させた。

佐世保で、彼女とともに同じ道を歩いた三日、七十二時間。それは彼にとってすべてがドラムを叩きつづけているような時間だった。最初の日、彼は彼女を佐世保橋からまっすぐ星条旗のひるがえる立神岸壁まで連れて行き、それから港と平戸島まで見渡せる山頂までバスで上ったのだが、中沢典子はいたる所で弾んだ声を上げた。二日目の夜、魚市場付近の屋台で飲んだコップ酒の酔いにまかせて、寝巻の上から彼女の肩に唇を押しあてると「約束よ」といったきりとりつくしまを与えなかった。東京を出発したばかりの列車の中で、どのような状態でも彼女の体に触れ

ないという約束を冗談事のようにかわしていたのである。桟橋近くの商人宿に素泊り一室千円の条件で二人は宿泊したのだが、三日の滞在を通じて、彼女は鮮かなほど床を並べている彼の情念を無視した。

彼は解体したバラックの前から空地を囲ったコンクリート塀に沿って歩き、歯科医院横の溝にふたたび生臭い唾を吐いた。翌日の特急で佐世保を去るという夜、かつてその場所で自分が負傷した市民病院際の橋に立って、明滅する米軍基地の照空灯をみながら二人は三日の間でいちばん長い言葉をかわしたのだが、話がそこにむかうのを彼女はそらしつづけた。

「どうしてそんなふうないい方をするのかな。返事にもなっていないじゃないか」

「あら、あなた何か、返事がいるようなことをいったの」

「これだからね。イエスでもノオでもどっちでもいいんだよ。おれのいうことを本気で考えてくれないかな」

「そいじゃ、ノオ」

「そんなふうに簡単にいうのか」

「だって興味ないもん、そんな話」

「興味ないかな。おれはずっとこの先、これからも君のことをいちばん自分の重要な生き方として考えて行くといってるんだぜ」

「興味ないな」

「じゃどうして……どんな奴ならいいんだ」

じゃ、どうして佐世保まで一緒についてきたんだ。彼は言葉の方向を途中で変えた。眼下の黒い河口に時折り、ぱしゃっという水音がするのは、誰かがボートでも漕いでいるのだろう。かつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

て進駐軍労組事務局のあった建物のあたりからぼそぼそとした話し声がきこえ、その付近を自転車の明りが線でも引くように走り去った。
「あなた、やっぱりあたしのことを誤解してるようね」
「誤解なんかしていないよ。だからこうして真面目に話してるんじゃないか」
「だからこうして真面目に……」彼女は語尾に口の中の小さい笑い声をつけ足した。
「何がおかしい」
「なぜだか、あたしはいつも不真面目な話ばかりしているようにきこえたから。もっとも、それは事実ですけれどもね」
「茶化さないでくれよ。おれはいつも、君のことばかり考えているんだ」
「興味ないといってるのよ、そんな話」
「じゃ、何に興味があるんだ」
「そんな声をださないで。困るわ」
「わるかった」と、彼はいった。「おれから好かれるのが、そんなに迷惑なのかな」
「あたしは感情的になるのが嫌いなのよ。別の話をしましょう」
「別の話か……」
「それとも帰る」
「いや、別の話でいい」
彼女がそこで「おかしな人ね」といったので、彼は少し気分を回復した。
「おかしいかな。おれは。……」
「あなたみたいな人が、此処で石投げていたなんてやっぱりおかしいわね」

彼女のずらしかかった話を、彼は引戻せなかった。そうすればそこにいること自体を投げだされる恐れがあったからだ。
「おれは投げないよ」
「どっちみち同じじゃないの。此処にいたんだから」
「そうかな、同じじゃないと思うけどね」
「同じことよ。投げるか投げないかを区別して考えようとするのは変だわ。あの時此処にいたらあたしだって投げたと思うな」
「わかりにくいんだな。そこのところが……」
「何だか騙されたみたい」
「え」
「橋のことよ。あたしが想像していた佐世保の橋はもっとごつごつしていたし、海だってこんなに静かじゃなかったわ」
中沢典子は話を完全に移してしまおうとして、それまで考えもしなかった思いつきを口にしている。彼にはそう思えた。
「佐世保になんかこない方がよかったんだよ」
「あらどうして」
彼女は語尾を上げたが、それもまたひどく取ってつけたように響いた。
「佐世保は君にマッチしそうにない。君の想像するドラマの舞台としてはふさわしくないんだ」
「つまり、佐世保にとって失格した女というわけね」
「佐世保が失格したんだよ。君の気持から……」

まるで川からでも浮かび上がったように、暗闇からあらわれた男の顫(ふる)える手が御厨竜秋の声を奪った。彼の肘にざらっとして冷たいものが触れたのだ。
「何だ。びっくりさせるな」
「すみません」男は素直な声をだした。もう五十には手が届いていようか。男はシャツとも上衣ともつかぬものを二枚合わせに着込んでおり、顎のあたりに、夜目にも赤く見えそうな腫物(はれもの)ができていた。「頼みがあるとですが、きいてもらえませんかね」
彼が黙っていると、男は「駄目ですかね」といいながら去ろうとした。
「おじさん、何なの」
「何ってまあ、乞食みたいなもんですよ」男は足を止めると彼女の方をみた。
「おもしろいことをいうのね」
「五十円めぐんでくれんですか。そうしたらマルタン節を歌いますよ」男はそういうと、シャツの袖で口許を拭いた。
彼はズボンのポケットから十円銅貨を三枚つかんで男に渡した。
「歌はいらんよ」
「あら、ききたいわ」彼女ははしゃぐような声でいうと、自分も小銭入れから五十円貨をだした。
「五十円でよかとですよ」男は彼女の掌から五十円貨をつまむと、代りに十円銅貨を返した。
「歌うなら別のをやってくれないかな。マルタン節はききたくない」
「マルタン節しか知らんとですよ」男はいった。
「マルタン節というのは筑豊の歌でしょう」
彼は露骨に顔をしかめたが、彼女は気付かなかった。上諏訪の開業医を父親に持つ中沢典子は

廃坑の現実をテレビでしか見ていない。
「おれが歌うのは北松のもんです」
腫物のできた顎を川の方に突きだすようにして歌いはじめた男の声をきくまいとして、彼は両方の耳を中指で押さえたが、御詠歌のような節まわしは、春先、ボタ山越しに灰色の泥土を巻き上げながら吹き下ろす玄海の荒(すさ)んだ潮風のように彼の心を嚙んだ。

そもそもの因縁は五年前
筑豊の流れ者がきて酔い狂うた時
気づいておれば助かった」
それをあんたはせせら笑うた
ああ、あん時八幡のセメント会社にさえ行っておれば
こんなうきめをみらずにすんだのに
やけのやんぱちで飲んだ酎のために手が顫える
足の膝もがくがくする
目の前で女房が体を売っとるのに
それを止めもできぬこの身の辛さ
毎日夕方バスに乗って行くのはマルタンのホステス
泣け、大阪の亭主たち
大阪に行くといって消えた父ちゃん
今夜は女どもが酎をうちくらう

そして歌うのは村田英雄の捨てて勝つ
何もかも捨てた上に負けてしまったおれたち

坑内、坑外の鉱員を合わせて約二百七十。家族とも千人足らずの鉱業所で、測量技手をしていた母方の叔父の家で、彼はずっとくらしたのだ。昭和三十四年閉山。それから二年も経たぬうちに博多の小さい運輸会社の机に俯せになったまま、叔父は生きて病院から戻らなかった。彼を生むとすぐ「私は潔白だ」という遺書を残して自殺し果てたという母親と、消息を絶ってしまった父親のために彼は叔父の家に引取られたのだが、製氷会社に勤務する良人を持つ叔母や、親類の家を盥廻しされながら、彼はやっと高校を卒えたのである。

男の足音が消えると同時に、中沢典子は「これで佐世保にきた甲斐があったわ」といった。

「それじゃ橋なんかみないで、北松に行けばよかったね」

「ああそうだ」彼女は明るい声でいった。「御厨さんも確か、炭鉱に関係があったんだわね」

「炭鉱になんか何も関係ないさ。北松には親類がいるだけ」

「そう」と、彼女はいった。彼のかすれた口調に関心の欠片さえ示さぬふうに。

ざまあみろ、これで佐世保にきた甲斐があったわ、などという奴を、腐っても自殺の理由になぞ選ぶものか。彼はそこから右の露地を入ればアパートの直接二階に上がる階段が見えるという場所で、はっきり口にだして悪態を吐いたが、中沢典子の突き放すような声は、一層深く彼のなかに揺れた。それは二人が佐世保から東京に戻って一ヵ月ばかり経った日曜日の午後、小田急の沿線に住む彼女のアパート近くの喫茶店であった。新学期に入ると間もなく彼の所属する私立大学内の創作研究会の中で思いがけぬ噂が立ったのだ。御厨竜秋に誘われて中沢典子は佐世保に同

行した。そして、平瀬桟橋近くの旅館に投宿した夜、あたしは誰とでも寝るけど、あなたとは寝ないわ、彼女がそういう台詞で彼をはねつけたというのである。

彼がそのことに触れた時、ルオーの模写を入れた額を背にして、中沢典子はいささかも動じなかった。

「どうせ海堂さんや大森さんあたりの作でしょうけど、おもしろいことをいうわね」

「そんなふうにいっていていいのかな」

「じゃどうするの。こんな噂が流れているらしいけど、真相はこれこれでしたとでもいってまわるの」

「不愉快だな」

「何が」

「そんないい方だよ、まるで投げてしまっているみたいじゃないか」

「投げてなんかいないわ。佐世保に二人で行ったということがわかれば、どんな噂が立つか位、御厨さんだって承知の上だったんでしょう。それを今更あれこれいわれたからって、気にする方がおかしいと思うわ」

「しかし相当のことをいわれているんだぜ」

「仕方がないでしょう。事実なんだから」

「事実だって」

「佐世保に行ったことよ。誰とでも寝るというのは少し買い被られているような気がするけど」

「何をいうんだ」

「事実だから事実だといってるのよ。噂みたいな台詞だって、もしかしたら吐いたかもしれない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.